

学校図書館支援センター通信 NO 12

10月号

平成20年度 市川市学校図書館支援センター(市川市教育センター)



保護者・地域と共に歩む学校図書館を!

市川市は、古くから小学校が核となって、地域の保護者と連携しながら子どもの読書環境を育んできました。そのため、学校を活動の場とする団体の多いことが市川の特徴と言えます。今では、大部分の小学校で、子どもの読書活動にかかわるボランティア団体が活発な活動を行っています。もちろん、学校関係ばかりでなく、活動拠点を公共図書館や公民館におく団体も数多く活動されています。

「子ども読書年」にあたる2000(平成12)年の市川市中央図書館の調査()では、「子どもの読書にかかわるボランティア・市民団体」が、市内に約80団体あることが報告されています。

これからも学校と保護者・地域が手を携え、子どもの読書環境を振興していきたいものです。

「市川市子どもの読書活動にかかわるボランティア活動調査2000」



本好きな子どもの育ちを願って ~ 市川子どもの本の会 ~

「本好きな子どもを育て、市川に良き読書風土を」という願いのもとに、先生、お母さん、行政が手を取り合い発足した『市川子どもの本の会』も今年30年を迎えました。おはなし会や「家庭と学校を結ぶ楽しい読書講座」等を通して、一人でも多くの子どもたちに読書の楽しさやすばらしさを感じてもらいたいと願っています。

子どもの本は、年間約3800冊近く発行されているそうです。お奨めの本の紹介や作者の想い、本に係わる課題等を講座を通して皆さんにお伝えしています。お忙しい先生方ですが、お時間がありましたら、ぜひ、読書講座など本の会の活動を覗いてみてください。子どもの本について、共に楽しく学んでいきましょう。先生方の参加が少ないととても寂しいです。

この頃、学級で読み聞かせのお手伝いをする方から「どんな本を読んだらよいか、悩み迷っています。」という相談を受けます。「お願いします。」で、お任せになっていないでしょうか。

子どもたちを一番よく知る先生が、想いや願いをしっかりと伝え、確かな選書ができるようにすることが大切です。それが、貴重な読み聞かせをより充実した価値のあるものにしていくと思うこの頃です。

(『市川子どもの本の会』第6代会長 大野多美子)

問い合わせ：市川子どもの本の会事務局 まで。

(連絡先は、支援センター事務局までお問い合わせください)



第4回読書講座(10月4日)
さわださち子氏 の講演



お奨め本紹介 ~ ぜひ、この一冊を! ~

『先生と司書が選んだ調べるための本・小学校社会科で活用できる学校図書館コレクション』

(鎌田和宏、中山美由紀編著 小年写真新聞社 2008)

子どもたちが調べ学習をするときにふさわしい資料となる約630タイトルの本が満載。学校図書館にぜひとも備えておきたい本が取り上げられています。辞典や百科事典、図鑑や白書等も充実。情報リテラシーの育成にも言及しています。高桑学校司書さん(稲越小)が、執筆者のお一人です。

読書週間と「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(第二次)

10月27日~11月9日(文化の日を中心に2週間)は読書週間ですね。各学校では、学校図書館を中心にさまざまな取り組みが企画されていることでしょう。

以前から市川には、読書週間の企画に辞書引き大会、朗読や暗唱や群読大会、早めの百人一首大会などを実施している学校が多くあります。子どもたち自身が読み聞かせをする活動を取り入れ、詩や俳句・川柳づくりを国語科の授業とタイアップしたりする企画もあります。これらは学校図書館での「言語力の育成を図る活動」と言えます。

新学習指導要領の柱として「言語活動の充実」をすべての教科で重視していることは皆さんよくご存知ですが、時を同じくして閣議決定された「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(第二次)においても、共通項があるのをご存じでしょうか。その中の学校等での取組の第一に「学校段階に応じた読解力の向上」をあげ、「言語力の育成に資する読書活動の推進」をうたっています。

「言語力の育成に資する読書活動」とは「読む、書く、話す」が組み合わさった活動であり、そこから「聞く」力もつくように思います。

朝の読書や読み聞かせも子どもと本を結ぶ大切な読書活動ですが、それに加え「言語力の育成」を意図的に取り入れた試みも、ぜひ学校図書館から発信してください。読書週間は良い機会です。

「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(第二次)

第一次(平成14年8月)から5年が経過し、その成果や課題を明らかにして平成20年3月11日に新たに策定された。

(文責 市川市学校図書館支援スタッフ 小林路子)

図書館の窓から ~ひろげよう!図書館の輪・リレー執筆~



「自分の得意な分野を生かして、あなたらしい図書館づくりをしていけばよいのですよ。」という先輩のあたたかい言葉と子どもたちのかわいい笑顔にささえられて、日々の仕事をしています。曾谷小の図書館では、掲示物や飾りに立体的なものを取り入れ、季節ごとに楽しい雰囲気を出しています。今の季節は、柿と栗のモビールです。また、天井の梁には子どもたちの描いた「おはなしの絵」を飾っています。自分で描いた「はたらくじどう車」の絵を飾ってほしいと持ってくる子どももいます。いつでもみんなのほっとする場所でありたいと思っています。(曾谷小学校 学校図書館員 森永暁乃)



柿と栗のモビール

路子の部屋

日書連(日本書店商業組合連合会:全国6300店の新刊書店の連合会)が募集した第3回「本の川柳」がホームページ上に発表されています。

(「本屋さんへ行こう」より <http://www.shoten.co.jp/nisho/>)

大賞は埼玉県の70代の方の『読書には、賞味期限はありません』確かにその通り、読書から得られるものは生涯の財産ですね。他の入選作の中には、『読書後に、おいしかったという子ども』(千葉県20代)、『思い出は、好きな絵本と母の膝』(東京都30代)など、子どもと読書に関わるものもありました。

各学校でもそろそろ読書週間(月間)の標語が決まった頃でしょうか。市川の子どもたちが作った標語も素敵なものばかりだったことを、思い出します。学校図書館内外に大きく掲示してあるのを拝見した時には、本と友達になりたい気持ちがストレートに伝わってきました。今年はどうな標語でしょうか。